

唐丹の民話・7話「片川地区」

常龍山の 権現さま



平成19年12月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

—常龍山の権現さま—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 発祥の地は、片岸の「沼の脇」	3
2. 大津波にさらわれて	3
3. 岬の夜に輝く不思議な光	4
4. 「的場」の人に拾われて	4
5. 悪魔祓いに三頭のそろい舞	4～8
6. お里帰りは、霜月の15日（参考）	9
(1) 御神楽舞（みかぐらまい）	9
(2) 地の森舞（ちのもりまい）	9
(3) 座俱利舞（ねまりくりまい）	9
(4) 立俱利舞（たちくりまい）	10
(5) 矢倉獅子舞（やぐらししまい）	10
7. 天照御祖神社（参考）	11
(1) 御社号	11
(2) 御神徳	11
(3) 御由緒	11
(4) 常龍山の由来	12
(5) 常龍山大権現の発祥は岩沢権現	13
8. 明治29年の大津波（参考）	13
(1) 三陸沿岸の村々をのみ込んだ史上最大の大津波	13
(2) 節句の祝いが一転地獄絵	14
(3) 唐丹村の最大波高は、小白浜の16.7m	14
(4) 唐丹村の被害も甚大なり	14

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材、釜石民話の会（平成2年発足）の機会紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「常龍山の権現さま」は、釜石民話第4集「権現さまの話」を再話著作したもので、その釜石民話第4集「権現さまの話」の原文は次のとおりです。

天照御祖神社には権現様は3頭おります。一つは荒川の熊野神社のものと、片岸の岩沢氏先祖の喜助と云う人が健康を願って上げたものと、また、小白浜の小野良介氏と木村子子松氏の寄進によるものです。

明治29年に大津波があり3頭の中の1頭が波に攫われて、村民総出で浜中探しましたが中々見つからず困っておりました。大石の金島と云う小さい島で夜になると煌煌と輝くものがあり、はて何だろうと皆不思議に思い船を出して行ってみると流された観音様の目が光っていたのでした。それを拾って届けてくれた家が大石の屋号的場と云う家なのです。

唐丹はもともと伊達藩に属しており4年目毎の大名行列の大祭があります。其の時は必ず大祭の始まる前に的場さんにお礼参りしてから出立すると云うことです。

権現様の舞踊りは大船渡の地の森師匠2名を招き夜も昼も習い本郷までお踊って行くのです。笛太鼓でお囃子と賑々しく評判がよろしいと云うことです。

岩沢清司氏の話 92歳

常龍山の権現さま

1. 発祥の地は、片岸の「沼の脇」

昔々、平安時代（寛治5年）片岸の沼の脇（屋号＝岩沢家）に、岩沢権現が開山され、赤の獅子頭を祀り、大津波や凶作、悪疫が流行るときには、「権現さま」を舞おどり危難払いをしていました。

その後の桃山時代（元和4年）に、この「権現様」が常龍山天照御祖神社にうつされ奉られました。



（沼の脇・片岸の遠景/昭和9年3月）

2. 大津波にさらわれて

今、常龍山天照御祖神社に、^{みかしら}三頭祀られている権現さまの一頭は、荒川の熊野神社から移されたもの。もう一頭は、片岸の岩沢家先祖の喜助さんという人が、健康を願ってあげた（寄進）もの。三頭目は、小白浜の^{ねね}小野寺良介さんと、木村子松さんが、あげたものです。



（常龍山権現御神楽）



（明治29年津波の図）

この三頭のうちの一头が、明治29年の端午節句におしよせた大津波。その波にさらわれてしまいました。

3. 岬の夜に輝く不思議な光り

村の人達が総出で、何回となく浜中をくまなく捜しましたが、みつからないので困ってしまいました。



(金島・松島・蒜島の近景手前より)

しばらくして、大石の金島あたりで、夜になると煌々^{こうこう}と輝くものがあるという噂が、どこからともなく人々の間に広がりました。

みんなが、「なんだろう」、「なんだろう」と言い合って不思議がっていましたが、噂をするだけでした。

4. 「的場」の人に拾われて

ある日の夜、大石の「的場」・(屋号)の人が、船を漕ぎ出し不思議な光り出る金島の方に行って見て、びっくりしました。

なんとそれは、波にさらわれた権現さまが金島に流れつき、その目が光っていたからです……。



(金島の遠景)

「的場」の人は、早速、その権現さまを拾い上げ、洗い清めて神社に届けました。

それで、今でも権現さまが三頭、津波前のように揃っているということです。

5. 悪魔祓いに三頭そろい舞

天照御祖神社には、3年に一度、御霊代^{みたましろ}を御神輿^{みくま}に奉遷^{ほうせん}(神体などを他の場所に移すこと)して氏子の生活や家々を視察するため、本郷の御旅所まで御巡幸渡御^{ごじゅんこう とぎよ}(神が方々を巡りあるくこと)する式年大祭があります。



(御輿渡御のハイライト・ギレ回る神輿)

権現様も、この大祭に参列して、神々の守護役として舞い踊ります。その時は、大祭が始まる前に、必ず「的場」さんに、お礼の挨拶をしてから出立します。



(常龍山御神楽)



(本郷：御徒・杖供・杖引組)

唐丹は、もともと伊達藩に属していて、当時、本郷の番所に駐屯していた藩士より、参勤交代の大名行列形式を竹刀や棒切れや竹竿などを利用して、教えられていました。



(本郷：御鷹匠)

大祭の時には、神々の警固のため藩士より教えられた、10石の格式の大名行列で、本郷は
御徒組・杖供組・杖引組・御鷹匠。

小白浜の御道具組。山谷の鉄砲組。荒川の御並槍組。大石の御弓組が侍の姿でお供します。



(小白浜：御道具組)



(山谷：鉄砲組)



(荒川：御槍組)



(大石：御弓組)

神々を楽しませるための手踊り、道々の悪魔払いのため小白浜の大神楽、本郷の伊勢神楽、小白浜や大石の虎舞、熊野権現や常龍山御神楽も三頭で舞い踊りながらお供します。



(小白浜：手踊り)



(小白浜：太神楽)



(本郷：伊勢神楽)



(荒川：熊野権現御神楽)



(本郷：桜舞太鼓)



(本郷：手踊り)



(花露辺：手踊り)



(花露辺：荒神太鼓)



(大石：虎舞)



(小白浜：虎舞)

これらの格式ある大名行列と笛や太鼓で舞踊る神楽や虎舞や手おどりの賑やかさは、「釜石さくら祭り」として、「本郷の桜並木」と共にこの地方の名物として有名です。



(本郷の桜並木・平成18年4月)

物語は、おしまい

6. お里帰りは、霜月の15日（参考）

例年霜月の15日には、天照御祖神社の祭日で、「お塩取り」といい、片岸海岸に行き海の神に神楽を奉納、権現さま発祥の地岩沢家にお里帰りして朝食をとり、社殿にかえります。

また、例年小正月の15日は、「権現まわし」といい、厄除けのため神楽は家々をまわり「門打ち」します。

その神楽舞の型は、つぎのようなものがあります。

（1）御神楽舞（みかぐらまい）



御神楽は、祭典では御輿の前に列なり、常に神々が出ずるところに守護役として、権現舞があり寵愛されています。

また、人間もこれを愛重しなければならないものと信じており、道々の悪魔払いを表したものです。

（2）地の守舞（ちのもりまい）

御神楽の力強い姿は、どんな悪魔も降伏せずには、おられないという神の威容を示した姿を舞にしたものです。



（3）座俱利舞（ねまりくりまい）



神の守護役のひとつ、小春日和に遊び戯れあう御獅子の姿を舞いの型にしたもので、激しく鳴る太鼓の響きに立ち上がり、勇壮な舞いは山野に生息する獅子の如くに表したものです。

(4) 立俱利舞 (たちくりまい)

三頭の御獅子が右に左に向きを変えながら、人々の迷える夢を振り払い、子々孫々に至るまで強く、野山を駆けめぐる獅子の如く、生きる姿を舞いに表したものです。



(5) 矢倉獅子舞 (やぐらししまい)



五穀豊穰、大漁祈願の神が、社殿入りの道々を御獅子が悪魔を退散させ、生きる力を与えてくれる生活をなぞらえて、その姿を舞いに表したものです。

6の(参考)の項 おしまい

7. 天照御祖神社 (参考)

(1) 御社号

じょうりゅうのやまのおかみのみや
常龍山大神宮天照御祖神社といい、祭神の主神は天照大御神で
あまつかみくにつかみやおよろずのかみがみ
天津神地津祇八百萬神々が合祀されています。



(常龍山大神宮天照御祖神社)

(2) 御神徳

天照大御神は、天地万物を照らし天地万物は、その神威により生を授られ、国土国民一切生業の守護神として、地上のあらゆるものの生々（おい立ち育てゆくさま）かいく 化育（天地自然が万物を生じ育てること）発展充実を、理想へと導かせたまう徳（身についた品性など）とく をそなえられています。

(3) 御由緒

天照御祖神社は、古くからこの地方の開発、鎮護（ちんご 乱をしずめて外敵・災難からまもること）の総守護神としてあがめられています。



(一の鳥居)

天照御祖神社が鎮座する聖なる丘常龍山は、太古より神々の鎮まり座す丘、御山と尊ばれ、山上の古大木跡は神々の憑依（ひょうい のりうつる）する神籬（ひもろぎ 神霊が降臨する聖城）、神霊のやどるしるし勸請木（かんじょうぼく 神の来臨を願う）で、その周辺も含め特別な祈願を籠めた祭場でありました。
まつりにわ

したがって、太古には、神殿がなく、神籬としての大木と磐座^{いわくら}に神々を古代の祀りをする形の信仰でした。

古代祭祀^{ゆにわ}の斎庭^{みたらしがわ}の、この御山を参拝する者は、お手洗川^{みたらしがわ}（現片岸川は、むかしは大鳥居のすぐ前を流れていた）にて潔斎^{けっさい}し、手を洗い登ったのです。

（４）常龍山の由来

常龍山碑（天文学者葛西昌丕書）によるとそれは、いまから約1170余年以前（大同2年・平安時代前期）、征夷^{せいゐ}（東方の未開人討伐）大將軍坂上田村麻呂^{えぞ}が蝦夷^{えぞ}（関東以北に住んでいた先住族）軍の総師大墓王^{たものきみ}をほろぼし、その残党である常龍鬼（鬼とは、大和軍が敵対する強い大将に名付けた言葉で、常龍鬼とは、真の蝦夷の大将であった）を唐丹のむらで討ちたおしたのです。



（常龍山碑）

ところが、この霊は、
怨霊^{おんりょう}（うらみをはらそうと）
として、あらびたため、霊を慰めしずめることを祈って、山上の一角に小さなお堂を建て、十一面観音像を祀りました。



（福壽庵・十一面観音）

そして、天照大御神をはじめ天津神地津祇と共にあわせ祀り、山号を常龍山としました。

この堂を建たことにより、神仏習合^{しゅうごう}（宗教の教えの内容のいいところを取り合わせる）の信仰となり、神社に付属する当寺として常龍山光学寺の成り立ちも後にありました。が、

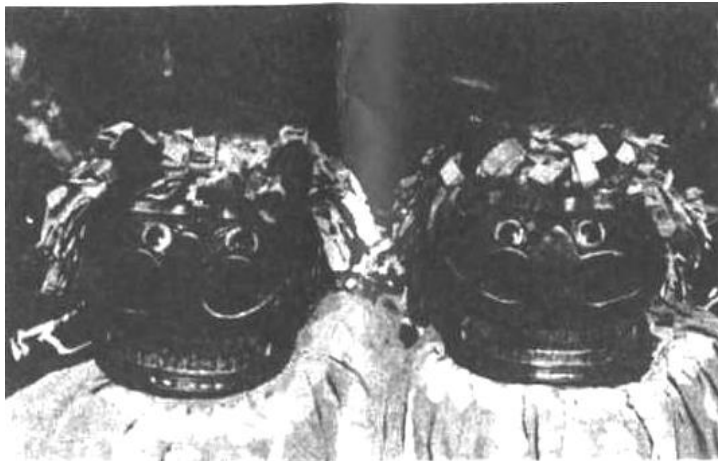
その後いく星霜^{せいそう}（年月・星は一年で天を回り、霜は年ごとに降るから）を経て寺は荒廃^{こんこう}（荒れて廃れ）しました。

明治2年、政府は神仏混淆^{こんこう}（入り混じること）を禁じたために、十一面観音像は本郷の福壽庵^{ふくじゅあん}に移し祀ることにしました。

そして、修験を廃して純神道^{じゅんしんどう}となり、社号を天照御祖神社として明治5年村社となりました。

(5) 常龍山大権現の発祥は岩沢権現

そのなかで、現別当河東家世代書によれば、片岸生、岩沢権現別当開山岩本坊、沼の脇にて院跡住職之方、寛治（平安時代）5年より始まる。6年より別当住職仕、保安（平安時代）4年7月19日死。とあり、かなり太古からつづいています。



唐丹町片岸・常龍山権現、天照御祖神社
寛文十二年銘（市指定文化財）

元和4年（桃山時代）には、この山の下の方片岸部落、沼の脇（屋号＝岩沢家）で祀っていた岩沢権現の獅子頭が常龍山に移管奉納されました。

この獅子頭を山の上に移し安置して、常龍山大権現と尊ばれ権現神楽が舞われるようになりました。

（寛文12年は沼の脇から移管4年後となり、現在、最古の常龍山権現二頭）

以上の（参考）の項は、天照御祖神社社務所発行文書及び釜石市誌唐丹小史・天照御祖神社と祭典並びに第18回釜石市郷土芸能・常龍山御神楽／片川町内会編より一部抜粋編集しました。

8. 明治29年の大津波（参考）

(1) 一三陸沿岸の村々をのみ込んだ史上最大の大津波一

6月15日午後7時32分、三陸沖200kmの地点を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生したが、距離が遠かったことから三陸沿岸はじめとして、それほど揺れも感じず、地震の被害もなかった。

ところが地震から約40分後、北海道から宮城県牡鹿半島にかけての海岸に津波が襲来。とりわけ三陸沿岸一帯には、突如轟音とともに猛烈な津波が押し寄せ、日本では史上最大の津波被害をひきおこした。

波高は2mから24m以上に達し、岩手・宮城・青森の3県の死者は2万余りにのぼり、1万戸もの家屋が倒壊または流失した。

この津波は、小笠原諸島やハワイなどにも到達したと記録されている。

（２）一節句の祝いが一転地獄絵図に一

この日は、旧暦の端午の節句にあたり、春からの豊漁つづきもあって、多くの家庭では祝いの団欒^{だんらん}の最中であつた。



（明治29年津波被害の図）

さらに前の年に終わった日清戦争から帰還した兵士の凱旋祝^{がいせん}いをしていた家もあったという。

そこに突如襲った山のような津波は、そうした団欒を一瞬のうちに地獄絵図に変え、人々は逃れる暇もなく、住家もろとも闇夜の海にのみ込まれてしまったのである。

（３）一唐丹村の最大被害は、小白浜の16.7m一

本郷14.0、花露辺13.8、荒川13.0、大石12.5mとかなりの波の高さである。

（４）一唐丹村の被害も甚大なり一

項 目→ 部落名↓	総 戸 数	流失戸数	現在戸数	全人口	死亡数	現在人口
花 呂 辺	3 4	3 2	2		2 0 5	6 3
本 郷	1 6 5	1 6 4	1		7 2 6	7 9
小 白 浜	1 1 3	1 0 2	1 1		4 6 0	1 6 4
片岸川目	2 4	1 5	9		8 1	5 5
山 谷	1 5	0	1 5		0	?
荒 川	3 0	1 7	1 3		1 2 2	4 5
大 石	5 0	1	4 9		1	?
計	4 3 0	3 3 2	9 8	2 8 0 7	1 5 8 5	?

以上（５）の（参考）は「本郷津波検証の集い」より

7の（参考）の項 おしまい

全ておしまい

◎釜石の民話・第4集：権現様の話

○話 し 手：岩沢清司さん／片岸（平成2年頃・92歳）

○聴 き 手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：中山志恵／小白浜地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：新沼裕・中山志恵（切り絵含む）

●校正指導者：新沼 裕／本 郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●再話完成：平成19年12月